

平成 28 年度 アドバイザー派遣事業 実施レポート

鳥取市立福部未来学園

研修テーマ 「遊びきる」から「学びきる」へ
～5歳→小1→小2の3年間を貫く幼小接続カリキュラムの開発～

- 1 日 時 第1回：平成28年 8月19日（金） 13:30～16:10
第2回：平成28年11月18日（金） 13:50～16:45
- 2 会 場 鳥取市立福部未来学園小学校
- 3 講 師 島根大学大学院教育学研究科教育実践開発専攻 肥後功一 教授
- 4 研修内容

◆第1回：夏季合同研修会

(1) 実践発表：「嬉しい！楽しい！大好き！」3年間のつながりを意識した初等ブロックの取組

□昨年度～本年度の取り組み：3年間でめざす子どもの姿（2年生の姿）、遊びと学びをつなぐ初等ブロック5つの領域（言葉・数・体づくり・仲間づくり・地域）、接続カリキュラム（案）、交流及び合同学習の実際、幼小教職員によるブロック会議等



□現在の課題：子どもの発達に即したカリキュラムづくり・施設一体型への対応

(2) 指導助言から

□遊びと学びをつなぐ意義、何を目標としているのか（例：学びの意欲、探究・思考力、思いやり・人権など）を明確にし、幼・小・中で共通のものとする。

□保育園・幼稚園にしかないもの、そこでしか育てられないものを大切にする。

□子どもの発達に区切りはない。そこに区切りをつける意味を明確にもつことが重要である。接続＝段差のつけ方だと言える。段差で子どもがつまづく時代であるからこそ、よい段差のつけ方が必要になってくる。

(3) 講義：「幼小中一貫教育を考える視点～教育要領・指導要領の改定を踏まえて～」

□幼稚園教育要領改定の中で、小学校教育～高等学校教育を貫く「3つの柱」につなげていくため、「幼児期までに育てほしい10の姿」が明示された。0～2歳は「学びの芽生え」の時期であるが、3歳～は幼児教育の一環として捉え、教育的活動を意識的に設定し、10の姿を踏まえて評価していくことが必要になってくる。

□学びに向かう意欲や態度の中核を成す土台は「心の安定」である。「自分がいい」と思える自己肯定感よりも、矛盾する2つの方向（自尊と自省、主張・反抗と受容・従順、分かつと分からない等）を抱えながら、それに引き裂かれず成長の力に変える「自己教育力」を育てたい。

□学校教育は基本的には Doing（できる・わかる）の力をつけ、子どもの自信を育てようとする。そこでは人との協働なども育まれるが、同時に一定の傷付きを抱えながら的確な自己評価を行いつつ健全な自己イメージを形成することが求められ、そのためには Doing の力が Being（在ること・母性が土台）の自信に支えられている必要がある。

□Doingを支える父性の基本は、枠・型・役を「守り」として与え、遠くの目標（自己実現）に向かう旅立ちを促すことである。生活習慣とは、外から与えられる型を使って“自分らしさ”を作ることの練習であり、型の気持ちよさ・快感を伝えることが大切である。

◆第2回：授業研究会

(1) 研究授業：幼小合同学習（5歳児・小1）「あきとふれあおう」



幼稚園の園外保育等の「活動」と小学校1年生の「生活科」の単元に、園児と児童と一緒に活動する時間を「合同学習」として位置づけ、活動・教科それぞれのねらいとともに「初等ブロックの目標」も設定した学習を展開した。工作3・遊び1の計4帳場を設け、1年生は主に教える側として園児と関わるようにしたが、最初は園児の表情が硬く、教える側・教えられる側という



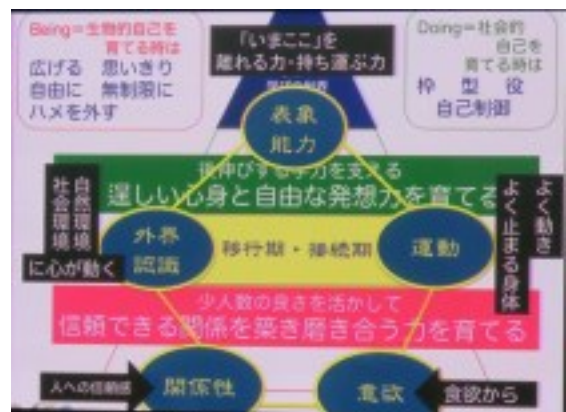
一方通行の交流となっていた。その要因としては、交遊関係を広げるためにペアを解いたことや、時間の関係でコーナー紹介・下見等、園児に見通しをもたせる活動を省いたことなどが挙げられる。しかし、時間の経過や教師の的確な誘導等によって徐々に活性化され、普段コミュニケーションをとることが苦手な子どもが積極的に話しかけるなど、個々の変容も見られた。

(2) 研究協議及び指導助言から

- 「関わり合う」は目標にならない。サービス目標を設定すると、子どもは「今日はやっては（作っては）いけないのかな」と考えてしまう。
- 環境構成・場の設定を考えること。例えば机の高さ・座る姿勢はどうであったか。机が長いと教える側・教えられる側に分かれてしまうので正方形・丸にすることも工夫である。
- 今日の学習は、まだ小学校の教育・研究の流れが主となっている。保育園では、異学年交流は当たり前である。教科の枠にとらわれず、一緒にやることの意味を第一に学習を構成してはどうか。
- ふり返りで画像を用いて確認するのは有効であった。それをどう言語化するか、言葉でつながり合う力をどうつけるかが今後の課題となる。
- “合同”学習の“いっしょに”は、物理的なものなのか精神的なものなのか。場を離れる“いっしょ”、“いっしょ”をつくる言語力をいかに育てるかを考えていく必要がある。

(3) 講義より

- 少人数の学校における接続・一貫は、“個”を考えることが重要であり、指導案等にもそれを表出させるのが望ましい。少人数のデメリットである「多様性の欠如」は、互いが別の顔を見せ合う機会（多面性）を設けることで補う。
- 福部未来学園初等ブロックが考える「5つの領域」と、新幼稚園教育要領における10の「育ってほしい姿」を関連させて、その構造を右図のように考えてみてはどうか。



5 研修成果

夏季合同研修会では、発達心理学・臨床心理学の見地から一貫教育を捉える視点を教示いただき、校種を超えて発達の全体性を押さえながら取り組むことの重要性を、幼・小・中の教職員で共通理解することができた。授業研究会では、具体的な園児・児童の姿をもとにしながら、本学園の実態に合ったカリキュラム編成への提案をいただいた。初等のみならず、中等・高等のカリキュラムを考えていくうえでも大変参考になった。